研究

蒲江浦の観音信仰史研究

坂本義明
（会員　蒲江町蒲江浦）

一、はじめに

蒲江浦の東の集落が地下である。地名から早い時期に集落が形成されたことと思われる。

この地下の背後に観音山がある。名前が示す通り、この山を縦断する参道に沿って、三十三体の観音（石仏）が安置されている。往時は霊場で、老若男女が朝夕に参拝し香華が絶えなかったろうに、昔日の面影は消えようとしている。参道には朽ちた巨木が横たわり通行をさまたげ、観音像の覆屋は破壊し野ざらしで、数体は風化剥落が進行している。

三十三体の観音像は、だれが、いつ、なぜ、どのようにして祀ったのかを明らかにすることは、日本人の宗教観、信仰の形、感性、ひいては日本人そのものを考えることにつながる。

二、観音信仰

1・観音とは

観音（観世音菩薩）は、インド南方の海上にある補陀落山に住み、「この世の生きとし生けるものを救うことを悲願とし、救いを求めるものには、ただちに手を差しのべる」と法華経第二十五普門品に説かれている。

観音は、庶民信仰の代表格で現世利益を本誓とした菩薩である。人々の願いは多種多様であるから一切の人々を救済するために、三十三様に姿を変化し現すと「観音経」にいわれている。それを観音の「三十三応現身」と呼び、観音霊場の数も三十三ヵ所となったわけである。

観音信仰の伝来については、速水侑氏の研究では大化前代と想定されている。

2・観音の姿

観音本来の像容を聖観音といい、ほかを変化観音という。その変化観音をふくめ、どのような観音があるかといえば、①聖観音　②十一面観音　③千手観音　④如意輪

観音 ⑤馬頭観音 ⑥不空羂索（ふくうけんじゃく）観音、天台宗系では、不空羂索観音の代りに准胝（じゅんてい）観音を当て、これら全部を称して七観音という。

三、蒲江浦の観音信仰

まず、どのような観音が造顕されたかを表示する。野ざらしで風化が進み、像容の判別がむつかしく、銘文も判読困難なものもあるが、おおよそ次の通りである。

番号	像名	銘年	銘文
一番	如意輪観音	天保十四年	同行連中　仲秋□□
二番	聖観音		海雲慈航信士　尊海信士
三番	千手観音		
四番	千手観音		
五番	千手観音		河内
六番	千手観音		文市
七番	如意輪観音		桂叢妙□大姉
八番	聖観音		猷山□居士　白岩
九番			ふじや　常吉
十番	千手観音		小蒲江大四郎
十一番	千手観音		又右衛門
十二番	千手観音		□助
十三番	如意輪観音		地下　文吉
十四番	如意輪観音		熊野屋
十五番	聖観音		萬人講　猪串
十六番	千手観音		志んや　嘉兵衛
十七番	聖観音		宇兵衛　□□屋
十八番	如意輪観音		
十九番	千手観音		鳥屋　金屋、三□屋
二十番	千手観音		平六　□平
二一番	聖観音		萬人講
二二番	聖観音		渕然軒汸施主□居士袋氏
二三番	千手観音		舛屋　倉屋
二四番	千手観音		未廣屋　源次郎
二五番	千手観音		大雲施主　願主□□
二六番	千手観音		大坂南部屋清左衛門
二七番	如意輪観音		嘉三
二八番	聖観音		佐五郎
二九番	馬頭観音		
三十番			
三一番	聖観音		
三二番	千手観音		
三三番	聖観音		

如意輪観音（1番）

聖 観 音（2番）

千手観音（4番）

1．像容・銘文による観音信仰の性格

造像においては、千手観音が多く、ついで聖観音、如意輪観音、馬頭観音も一体ある。

千手観音は、名称の通り千本の手を持ち、各手ごとに一眼を持ち、慈悲の手と眼とで衆生を救い上げるとされている。

聖観音は、慈愛を表わす女性的な姿に造られるので女性の信仰をあつめ、信仰の供養塔として造立された。

如意輪観音は、意のままに宝珠だの法輪(智恵)を用いて、衆生を救済する観音である。

馬頭観音（29番）

馬頭観音は頭上に馬頭をいただき、けわしい忿怒相をしている。人間の煩悩を馬食のごとく喰いつくしてくれるということを表わしている。牛馬の守護・慰霊仏であり、また交通の安全をかなえてくれる仏でもある。

さて、前掲表の観音像に刻まれた銘文から造立されたのは、天保年間で造立者は蒲江浦、小蒲江、猪串、河内の富者、講などの信仰集団、注目に価することは、大坂南部屋清左衛門がかかわっていることである。

観音は規格化されて造られたようで、個性に富んだものは少ない。専門の工人によって造られたものと思われ

る。少なからぬ資金を要したことはいうまでもない。

前掲表から観音造立にかかわった者は、少なくとも百人は、くだるまい。家族を含むと相当数の庶民が観音を信仰し、自らの生活のよりどころとしたことだろう。信仰の熱気ある時代であったことを読みとることができる。急勾配で岩石の多い参道であることから、観音を祀るには大変な労力を要したことであろうが、漁の合い間に老若男女、力を合せ参道を完成したことだろう。

蒲江浦一帯は、古来漁業が盛んであった。暖流に乗った魚の回遊が多く、佐伯藩は藩政初期から、きめ細かな漁政を行ない漁業の保護・奨励にあたった。天保年間には網の改良が盛んに行なわれ、漁法も進歩し漁獲高もふえた。漁獲の多いのは鰯である。鰯を煮てしぼり魚油を汲みとって灯油にし、そのかすは日に干して「ほしか」にして肥料とする。あるいは塩をして干し魚にする。いずれも貯蔵や輸送がきくので、瀬戸内から兵庫・大坂にまで積みのぼった。交易によって、相当数の播磨・讃岐・土佐、摂津等の産物を運ぶ船員や商人が滞在したことが「当浦日記」(文化三年より、蒲江浦王子宮の神官であった疋田権太夫が書き遺したもの)に記されている。東光寺(正保三年に創建された臨済宗妙心寺派のお寺)の過去帳にも播磨・摂津・讃岐・土佐の者が目につく。

三十三体の観音像は江戸時代の証言者である。民衆が経済的な力を蓄えだした時期と観音造立は表裏の関係にあるのではなかろうか。

なぜ、民衆が造立したのかは、観音の姿によって、おおよそわかる。より確実なのは、碑面に書かれた銘文を読むことである。

観音像は、その大半が千手観音である。密教で千手観音を本尊として、除災などを祈願してきたことから観音信仰の中心が除災招福の生者現世利益にあると思われる。

蒲江浦の民は海に向って生きてきた。旧暦の二月・八月は突如として海が荒れる。海難が多い月である。海上の風雨の危険は最も恐れたことであろう。沖に出た肉親の無事を毎日祈らずにはいられない。

また、漁の有無は死活問題でもあることから豊漁の祈願もなされたことであろう。

天保のころになると政治がいきづまり、各地で天災や飢饉が続き百姓一揆がしきりに起った。「当浦日記」に

よると蒲江浦の人々も自然災害や疫病に、しばしば苦しめられていた。特に疫病（ほうそう）は流行し始めると手のほどこしようがなく、大勢の人々が病死している。人々は神仏に救いを求めた。天保年間の時代相からも除災招福、現世利益を願っての観音造立が、色濃く表われているのではあるまいか。

次に銘文から、亡者追善の信仰が併存することがわかる。すなわち、前掲表の二番、七番、二十二番の三体の銘文は肉親の戒名と思われる。亡者の冥福を祈っての供養、先祖崇拝の信仰であろう。蒲江浦の観音信仰は追善的性格もみられる。

観音山山麓の墓地

現在でも人々は墓を大切にする。毎日の墓参は習慣化している。墓地は社交の場の様相を呈する。

2．霊場

〈観音の三十三応現身にちなんだ西国三十三ヵ所（和歌山・大阪・奈良・京都・滋賀・兵庫・岐阜）〉

観音霊場巡礼の信仰は平安時代後期に成立したといわれている。江戸時代になると民衆の間で各地に三十三ヵ所を模した霊場が形成された。

蒲江浦の観音山は、地理的至便さによって形成されたミニ三十三ヵ所霊場である。

参道の入り口に東光寺がある。境内に薬師堂、大師堂、稲荷、地蔵像、庚申塔がある。参道の中腹には王子神社がある。人々は、神も仏も同次元でとらえ、順々に参拝し神仏の加護を祈ってきた。大方の民衆の宗教観は極めて寛容である。

観音山一帯には、仏が多く祀られている。このことは先祖が懸命に生きてきた証そのものである。信仰生活によって、安心・希望・畏怖・感謝の気持ちを持ったにちがいない。

破損の著しい観音像

少数とはいえ、今日なお祈りをささげる人達がいる。ふもとに近い観音像には花が供えられ、十円銅貨が賽銭として数枚置かれていた。

物質文化中心の現代においても観音信仰が生き続けていることを知り、安らかな気持ちを禁じえない。現代の世相は寒心にたえない。物質から生命に思想の核心を移さなければならない想い、しきりである。

おわりに

以上私は、観音信仰史を造像を中心に調査・研究し考察したが、観音信仰史の極めて大きな部分である札所と巡礼の研究が不十分で、しかも浅学の身ゆえ観音信仰史も卑見の域を出ない面を露呈している。

それにしても、蒲江浦の観音像は庶民の歴史の証言者であり、信仰遺物として立派な文化財である。大事に次代に引き継いでいかなければならない。

八月になると、台風の接近で断続的にはげしい降雨が続いている。夕刻雨が遠のいたので参道を逍遙した。眼下の蒲江湾を眺めて鎮座している観音は、今日も海上生活の安全を願っているようで慈眼にあふれていた。けたたましいとさえ感じたウグイスの鳴き声も山麓から消え、ひとときの静寂の中に季節の流れを感じた。

〈参考文献〉

・速水　侑著　観音信仰
・速水　侑編　民衆宗教史叢書第七巻　観音信仰
・船富義夫著　観音信仰と生活
・蒲江町教育委員会編　蒲江町史
・東洋文化学院発行　野辺の石仏
・蒲江高校　蒲江町の集落
・渡辺克己著　豊後の磨崖仏散歩

赤松峠

宇目町の南東部、重岡の集落から南に山越えで宗太郎に至る間にある峠。標高四〇一㍍。

江戸期は梓峠と並ぶ日向路の重要な峠であった。西南戦争の古戦場として知られる。また、古くから往来する人は多かった。明治・大正期の文豪徳富蘆花も、大正二年(一九一三)九月一六日、重岡から赤松峠を越して宮崎県へ旅をしている。現在、峠路は林道となり、車が頂上まで登る。北の道はよいが、南の宗太郎へは赤松谷のきびしい道である。(『宇目町誌』)